

淫鬼喰らい巫子・竈門炭治郎

※体験版※

夜も更け、すっかり人通りのなくなった遊歩道を、我妻善逸は力なく猫背で歩いていった。

「ほんと富セン・・・富セン・・・」

憑りつかれたように人物の名を呟くが、善逸の声には怒りというよりも、疲労困憊から出る呪詛のようなものに近い。

善逸は学園では風紀委員を任されているが、そろそろその肩書も大きな悩みの一つとなっていた。

（あー、もういやだ！辞めたい！）

そう思いながらも、富セン、こと富岡先生は話を聞いてくれる前に手が出るタイプで、今日も碌に話を切り出せず「髪の毛を染めろ」とグーパンを食らった。

「なんであんなのが教師やってんだよ・・・意味わかんねえ・・・」

ブツブツと文句を言いながら、善逸は猫背を深めて帰路を歩く。

途中で真つ暗な公園に差し掛かる。日頃は申し分程度に街灯が点いているが、市の怠慢か、機能している明かりは一か所しかない。

（そういえば、最近ここで首つり自殺があつたって言ってたよなあああ）

人一倍怖がりな善逸は、それを思うと頭から血の気が引き、背中にゾワゾワした恐怖を感じて小さく震えた。

しかしこの公園のどこで首を吊ったのだろうか。

恐ろしいながらも、怖いもの見たさの好奇心も若干湧いてくる。しかし今の善逸は怖さ8割、見たい気持ち2割だ。

そーっと公園に視線を向け、善逸は公園の一角に白くほんのりと明かりが灯っているのを目にする。

あんな低位置に明かりなどあろうはずはなく、かといって懐中電灯やランタンの明かりではない。

そんな感情のない明かりではなく、目の前の灯は柔らかく、月光のように優しく、朝日のように爽やかだった。

明かりの元を凝視し、善逸はカバンを取り落とすほど驚いた。

寝そべった男の上に、裸の女が跨っている。いわゆるアオカンの現場に初めて出くわし、善逸は恥ずかしさ半分、興味半分でその様子から目が離せない。

男に跨った女が顔を空に向かってあげて仰け反った。

(あっ、可愛い！)

その瞬間女の顔面を目にし、善逸は反射的に興味をそそられた。

女の髪は短くて少年ともとれる風貌だが、薄く光った身体の明かりに照らされ、その髪は燃えるような赤毛だった。耳の左右につけられた大振りな長方形なピアスが揺れ、それがなんだかより卑猥に見える。

しかし男に跨っている肢体は白く円やかで、引き締まった腰や瑞々しく生々しい太腿が目に入り、燐光のように明かりを零すその裸体は、まるで女神の様だった。

(あれ？全然胸ないぞ？)

白い肢体を晒す人物の身体を舐めるように見ながら、善逸はその瑞々しい肌の上半身に、女性としてあるべき膨らみがないことに気づいた。

胸のない女の子だろうか？と初めて見る他人のセックスに目が離せず、善逸は薄光る肢体を眺め続けた。しかし、異変に気付く。

白い少女が跨っている男の姿が、真っ黒なのだ。まるで影を組み合わせて作ったように黒く、明らかに普通の人間ではない。

(うわわ、とんでもないもの俺見ちゃってるんじゃない？)

心臓の音が高鳴り、ここから逃げるように本能は警告音を鳴らす。若い善逸は目の前の色事の一部始終から目が離せない。

すると影男が突然、跨っている美少女の腰を掴み、自ら激しく振り立てた。

これまで主導権を握っていたであろう赤毛の美少女が明らかに戸惑い、その可憐な口を開いて天を仰ぎ、白い肢体を仰げ反らせた。

(やっぱり胸ないよな・・・)

しかしそれはどうでもよいほど、顔面が可愛い。もっと近くで見たい衝動に駆られるが、目の前で行われている所業は明らかに自分が触れていい物ではなく、世間の常識では説明できない、いわゆる超常現象に匹敵するような行為なのだ。鈍い善逸でもわかる。

影男の動きが激しくなり、それに合わせて赤毛の美少女の身体も大きく縦に揺さぶられる。

(うわ、うわうわうわうわ！)

逃げなければ、という本能の警鐘よりも、性欲が勝ってしまう。善逸は二人の性交に目を離さずにおれず、生唾を飲み込んで身体を固まらせてじっと見守り続ける。

「ウグツ・・・ウオオオ・・・！」

まるで人間の声ではない。あえて言えば、木が暴風で擦れあう衝撃が辛うじて人語に聞こえるような奇怪な声だった。影男は相手の臀部を鷲掴み、美少女が壊れそうな勢いで激しく上下に動き続ける。

善逸の位置からは美少女の声が聞こえないが、彼女も相当感じているらしく、白く蠱惑的な肢体を前後に反らせて魅惑的な反応を示している。赤毛を振り乱して口を開き、聞こえない嬌声を上げ続けて身悶える彼女は、善逸に一瞬恐怖を忘れさせるほどに妖艶だった。

「ウウウッアアアア！」

影男の咆哮が、まるで公園中に響き渡るように空気を震わせて放たれる。

(うわ、耳が・・・！)

とっさに押さえる行動をしながら、善逸は見た。

上に乗っていた赤毛の少女が白い身体をほんのり紅く染めながら、上気した美貌で早口に何かを唱えたのだ。

すると影男の口から青白い霧が突如噴き出し、近くにある立木を超えるほどの噴射量が吐き出され、善逸は再び怖気を感じ、その場に尻もちをついてしまった。

(なんだあれなんだあれなんだあれ！)

しかし、善逸がもつと困惑したのはその後の出来事だった。

影男に良いようにされていた赤毛の美少女が、どこからか日本刀を持ち出し、柄を握ると、抜刀と同時に男の口をかすめて霧を水平に斬った。すると空中にあつた霧は霧散し、吐き出した影男の身体もボロボロと崩れてゆく。

(あれ・・・何・・・?)

恐怖心よりも性欲よりも、純粹な好奇心と戸惑いが、一連の出来事から善逸の目を離させなかった。

すでに存在を失くした影男のいた位置に、赤毛の美少女が立ち上がる。一瞬ほの白く光った身体に照らされ、無駄な肉ひとつない、のびやかで瑞々しい裸体の背中が現れるが、彼女が片手にした剣を縦に振るうと、なんと一瞬の間に衣服を纏った。その後姿には、緑の市松模様の羽織がかけられ、変わったズボンを履いている。

そして赤毛の少女がこちらを振り向いたと同時に、善逸は急激に恐怖心を沸き立たせて、すぐさま背を向けると四つん這いになって転びそうになりながらも、なんとかこの場から離れることに心身を注いだ。

(な、なんだあれ、ほんとわけわかんない！)

道路にさしかかって帰路に着くべく、善逸は全速力でアスファルトを蹴って、陸上選手かくやという速さで場を後にした。

取り残された赤毛の人物は、その後姿を見て一つ大きなため息を吐く。

上半身には学ランのような黒い詰襟の衣装を纏い、ベルトで止めた袴の腰に、裾を脚絆で絞って、草履を履いて立っている。その肩には緑の市松文様をした羽織がかけられ、その姿で刀を持つ姿は1枚の絵のよ
うに恰好がついていた。

「初任務だったのに・・・人に見られるなんて、また怒られるなあ・・・」

赤毛の少女、いや、少年と言ったほうが良い声色で、その人物は花札のような耳飾りを揺らし、再びため息をついた。

※※※

そう言いながら、富岡は淡々とした動きでジッパーを下ろす。

「い、いいです！もう陽の気は貰いました！陰の気はすでに昇華してます！」

「いつ、誰に陽の気を貰った。俺は一部始終、ずっと見ていたぞ」

（遠隔視野もあるのか、この人。さすが柱・・・って、感心してる場合じゃない）

そのままズボンを引き下ろされ、富岡はすぐに現れた炭治郎の雛先を見て眉を顰めた。

「お前、下着は？」

「えっ・・・あ、ああ、さっきの浄化ではぎ取られたままで・・・」

しかし富岡は炭治郎の言葉が終わるより早く、いきなり雛先を片手で握り込んだ。

「いつ・・・あ、ああっ・・・！」

炭治郎の身体がビクンと跳ね上がり、腰の奥が急に疼きだす。

（なんだこの人の手、凄く熱い・・・）

ただ触れられているだけなのに、身体の淫欲が呼び覚まされ、肌が粟立つように敏感になってくる。

緩く擦られて、炭治郎は激感で驚きのあまり悲鳴をあげてしまった。

「うわあっ！あっ！」

「おまえは本当にうるさいな」

富岡は文句を言いながら、相変わらず淡々とした調子で炭治郎の雛先をさすっている。

「んんっ……だ、だって……おかしい……こんな、ああ、熱いっ……！」

乗られていなければ暴れさせていただろう両足をヒクつかせ、炭治郎は喘ぎ始めた。まるで快感神経を直接触られているような悦楽に、快感に弱い炭治郎の身体はすぐに順応した。雛先に血が巡り、身体中で熱が湧き上がり、吐く息が熱くなってくる。

「ヒノカミの巫子は、発情すると薫る、というが……なるほど」

疼熱で潤み始めた炭治郎の赫い目を見つめ、富岡はその唇に自らの唇を重ねる。

(えっ……キスされた……)

炭治郎の心音がトン、と大きくなり、口の中に入ってくる舌に緊張してしまふ。熱く分厚い舌が口腔に入り込み、炭治郎の上顎をなぞった瞬間、ぞく、と背中が甘く痺れた。それに味を占めたのか、富岡は連続して上顎のあたりを舌先でなぞり、最後に口の中をぐるりと舐め回して口を自由にしてやった。

「んっ……んん、は、はあ、はあ……」

まるで達悦したかのように表情を淫らに蕩けさせ、身体中から力が抜けている。そんな炭治郎を見下ろし、富岡は言った。

「……獣臭い」

甘い口づけの後に辛辣な言葉だったが、炭治郎は別段ショックを受けた風もなく、今もキスの余韻で息を荒している。

「さつき・・・淫獣の精液・・・たくさん飲んだから・・・」
恥ずかしげもなく言う炭治郎に富岡は眉を顰め、もう一度唇を近づける。

「んんっ、キス、もう嫌です、こういうのは・・・」

しかし富岡は炭治郎の制止を聞かず、再び唇を落とす。今度は逃げる舌を捕まえて絡ませ、表面や裏側を撫で、最後に強く吸って唾液を飲み、ようやく離れる。

「おかしいな」

喘ぐ炭治郎を見下ろしながら富岡は呟き、炭治郎の雛先を再び弄びにかかると。

「あっ・・・！ぐ、んんっ・・・！はあ、今、さわったら、ああ、いつ・・・イク・・・っ！」

「出させるためにやってる。出せ」

相変わらず淡々とした声で言葉を投げかけられるが、それとは打って変わって、富岡の掌は異常に熱い。快楽の源泉を扱われて、むき出しになった神経を愛撫されているほどの激しい愉悦が、背筋から脳に伝わってくる。

（なんで？淫鬼でも、こんなに感じないのに・・・）

富岡の手の動きが速くなり、炭治郎は一気に流れ込んでくる快楽を頭で消化できず、身体で感じるまま、快感を貪ってしまった。

「あ、ああああっ・・・！」

雛先から勢いよく白液が迸り、炭治郎の下腹から腹筋にかけて広がってゆく。

これほど強烈な射精感を味わったのは久しぶりだった。炭治郎の仕事柄、絶頂には幾度となく上り詰めさせられる。快楽を堪えてハズすこともできるが、イッた方が淫鬼は悦び、精液の量も多くなる。

修練は積んだが、結果、演技が下手な炭治郎では感じる真似、イク真似、などできないため、感じるままに反応するしかない。

もし炭治郎が不感症だったら、淫鬼喰らいの巫子として成り立っていなかっただろう。

「はーっ、はあ、はあ、はー・・・」

炭治郎の射精は通常の男子とは違い、射精してすぐに絶頂が終わるのではなく、女性のようにゆっくりと快感が降りてくる。ヒノカミ協会の限られた者しか知らないので、炭治郎は自分のイキ方が普通とは違うことに気づかない。

射精しても未だに震えながら力を持ち続ける雛先を不思議そうに眺めながら、富岡が先端を指の腹で擦ると、炭治郎の腰がビクビクと痙攣し、あ、あ、と甘い声が零れる。

（んっ・・・気持ちいい・・・）

ほぼ無理矢理絶頂させられたというのに、炭治郎は射精の快感と余韻に浸っていた。これだけ快感が深いと何も考えられなくなり、炭治郎は無防備になってしまう。しかし相手を引き付ける催淫の香りと妖気を強烈に薫らせるため、浄化中にも深い悦を極めてしまったら凌辱の的になる。

強力と呼ばれる淫鬼喰らいの術は、諸刃の術でもあった。

「んん、んっ・・・ん・・・」

富岡が再び口づけ、炭治郎の喉から聞く者の理性を蕩かせる甘い声が零れる。富岡の舌で口腔を舐め回されながら、雛先を小刻みに擦られ、炭治郎は再び深い射精絶頂に至ってしまった。

(あ、頭痺れ・・・キスされながら、だと・・・なにも・・・)

炭治郎は自分の胎が濡れるのを感じながら、涙が出そうな愉悦を貪り続けた。

富岡に唇を離され、目がかち合う。本当に綺麗な男だ。この男がなぜ自分の身体を暴いているのか甚だ疑問だが、またキスをされて何も考えられない。

「んっ・・・ふ・・・」

唇を離されると唾液の糸が二人を繋いだが、すぐに儚く消え去った。すると次に富岡は、炭治郎のまろい頬に自らの頬を寄せ、猫のように擦り合わせてくる。耳をペロ、と舐められて首の後ろに痺れが走り、ふあ、と炭治郎が声を上げると、今度は頬をはむはむと甘噛みされた。

(獣みたいだ・・・)

すっかり抱かれる身体になってしまった炭治郎は、身体の疼熱に包まれながらぼんやりと思う。それにしても、両手を拘束している綱が邪魔だ。無ければ、その背中に手を回して抱き着きたい。

「なんだ、もう発情したか。堪え性のない奴だな」

炭治郎を嘲るように言いながら、腹筋の上に散った白液を指で掬い、炭治郎の目の前で舐める。

(な・・・)

なにしてるんだこの人、と炭治郎は急激な羞恥を感じたが、富岡は相変わらずの無表情だ。しかし、ふと眉を顰め、舐めた自分の指を見つめる。

「ん？本当に陰気が溜まっていけないな。どういうことだ？」

飢岳を浄化したとき、身体に降った陽気が陰気を払拭したのだが、目の前の美しい男にはわかっていないらしい。

しかし説明も面倒なので、炭治郎はただ息を吐いていた。腰の奥がドロドロに熱く、無惨に植え付けられた淫靡な性が表面化しそうになってしまう。

「あれだけ穢されながら、なぜだ？」

ぐい、と顔を近づけられながら問いかけられ、雄の臭いに炭治郎の胸が一気に高まる。首の後ろが熱くて、息が荒くて、涙が出そうになってくる。

炭治郎から返事を感じ取れない様子を見て、富岡は顔を引き、炭治郎の身体の上から降りたが、今度は足元で引っ掛かっていた制服のズボンを完全に脱がせて、両方の膝裏を片手で纏めて掴み、高くに上げられてしまう。

「本当に濡れるんだな・・・」

炭治郎の秘孔を見ているのだろう。暴れたいほど恥ずかしいが、それを思うと逆に身体が熱くなり、腰の奥が溶けそうになってしまう。

「ああっ！」

富岡の空いた手が動き、指を二本ほどいきなり突き挿れられたらしい。ぞくぞくつと炭治郎の身体を淫熱が駆け登り、赤毛の先までを痺れさせてくる。しかし、この富岡という男の身体はどうなっているのだろう。

手で触られても口で触られても、どこも、もの凄く気持ちがいい。
「ううっ・・・あ、あつあつ・・・！」

※※※

禁欲的な装束の下が裸の滑らかで白い生足というのが、背德的で艶めかしい。両足をハの字に開かされて触手で強く締められ、鉄枷でもされているかのように、一切動かすことができない。

「んっ、んっ！んんー！」

嫌がる炭治郎の唇に無理矢理口づけ、片方の手は狩衣の前垂れの下へと忍び込む。

「んーっ！んんんんっ！」

口づけられながら抗議の声を上げようとするが、唇で塞がれた上、口腔に舌を挿し入れられて、炭治郎は困惑する。

「なんだ、やはりもう濡れているじゃないか」

炭治郎と口づけしているはずなのに、真正正銘無惨の声で笑う。炭治郎の雛先に触れた無惨の手は、その幼い器官を掌で弄び、さらに奥の秘孔へと指を進めた。

「んんんっ！あっ！やめ、いやだ！」

口づけを振り切って炭治郎が叫ぶが、その瞬間には無惨の指が秘孔に滑り込まされている。初めて味わう異物の侵入に、炭治郎は嫌悪すべきところだと言うのに、何故か背筋に甘い衝撃を走らせて、弓なりに仰け反った。

「ほお・・・巫子は欲情するところが濡れると聞いていたが、本当に濡れるとは・・・まさに慰みものの巫子だな」

「な、慰みもの、じゃ、ないっ！ああっ！」

無惨の指がさらに奥へと侵入し、甘い痺れが連続して炭治郎を襲う。これまでで味わったことのない感覚に戸惑いながら、炭治郎は無意識に屈辱的なことなのだと思知していた。

胎に侵入した無惨の指が、伸びているとしか思えない動きで内壁を摩擦し、そのたびにぞくぞくと妖しい感覚がせり上がってくる。

「うああっ！やめろ、あっ・・・！」

一瞬触れた内壁の一部でひどく感じる部分があり、炭治郎は本能的に危険を感じ、無惨に悟られまいとした。

「ほお、もう快楽を拾うか。処女とは思えん淫らぶりだな」

「そ、そんなことはない！」

しかし炭治郎の胎は淫蜜をどんどん溢れさせ、ベッドに滴るほどになっている。

「もうすでに被虐の巫子としての改造は済んでいるのか。私に犯されるためにあるような身体だな」

『犯す』と聞かされ、炭治郎は力の限りを込めて拘束を外そうとした。男に、しかも無惨に犯されるなど死んでも嫌だ。

「その目で睨みつけられながら犯すのも良いが、まずは下ごしらえをさせてやろう。さあ、悶え狂ってもらおうか」

無惨の指が一気に抜け、炭治郎は身体からどっと汗をかき、荒い息を繰り返した。ようやく未知の感覚から解放されたと言うのに、秘孔にぬるつく何かが当てられている。

「ひっ……っ！」

びく、と炭治郎の身体が跳ね上がるが、その物体は秘孔へとぬめりながら侵入してくる。

「あぐっ……っ！あつ！あつあつ！」

再び背筋を流れる甘い感覚に戸惑いの声を上げ、背中を仰け反らせるが、無惨が狩衣に爪を立て、引き裂き始めた。

「や、やめろ！嫌だ！触るな！」

「その意気だ。最後まで抵抗してみせろ」

分厚い神楽装束の下から現れた、薫る白い素肌が露にされ、そこに差し込んでくる無惨の手に必死に抵抗しようとする。

しかしそんな炭治郎の努力も虚しく、無惨の掌は破かれた衣装から差し込まれ、胸部全体を撫で回してくる。

「ん、んん！や、やめろっ……っ！」

無惨に触られる部分が熱くなり、炭治郎は弱った声で拒絶の声しか吐けなかった。

自分の身体はおかしくなっている。ずっと嗅がされていた香の効果か、無惨の術か、洞内に侵入している触手のせいか、炭治郎は泣きたくなるほど切ない欲情に駆られ、熱い吐息を吐き始める。

秘孔に頭を突っ込んだ触手がぬるぬると胎の奥へと侵入し、中を探り回ってジンジンとした感覚が止まらない。秘孔からは炭治郎の流す淫蜜が零れ、感じているのは一目瞭然だ。しかし交わりが初めてな炭治郎は、これが快楽だとはわからない。

頭が妄つとして、身体が甘く震え、裏返った声を上げそうになってしまう。

無惨が上半身の神楽服をほとんど切り裂いて、袖だけ残した乱された姿にしてしまう。禁欲的な、神聖な服が乱暴に引き裂かれ、覗く甘そうな皮膚が官能的だ。

炭治郎の両手を拘束していた片手を離し、代わりに触手に縛らせて、無惨は両手を使って炭治郎の肌を堪能し始める。

「っ、くう、さ、触るな！いやだ！」

どちらかと言えば冷たい無惨の手が肌の上を伝うたびに、怪しい感覚が突き上げ、炭治郎は唇を噛んで反応を抑える。

「お前は陽の塊・・・私は陰の塊・・・互いに相反する性質が交わった時、どんな感覚が得られるか、実に楽しみだ」

曝け出された慎まし気な桜色に手をかけると、指でゆっくりなぞり回す。ぞくん、と炭治郎の背中が跳ね上がり、愉悦の反応を返してくる。

「んんっ・・・そこ、変・・・」

「変じゃないんだ。これは快楽なんだよ。炭治郎」

(快楽・・・?)

例えそれが快楽だとして、炭治郎は感じたくなかった。憎い相手に身体を好き放題に触られ、こんな屈辱的な状況で、愉悦など欲しくない。

しかし桜色を抓まれると、そこから熱い感覚が広がってつい反応を返してしまう。

(浅ましい・・・！)

自分をなじりながらも、炭治郎の肌は完全に快楽を受け入れるようになっていた。

秘孔に突き込まれた触手が上下に挿入され、胎でいいようなない激感が生じる。

「んんっ！いやだ！」

無惨が未成熟な炭治郎の雛先に触れ、巧みな動きで刺激してくる。思わず腰が蕩けそうな感覚に炭治郎の下半身は痙攣し、肌から官能の汗を染み出させていた。

「いやっ・・・！ひっ・・・ぬ、抜け・・・っ！」

触手が前後するたびに胎の中が熱くなり、どんどん快楽が上がってゆくのを炭治郎は確かに感じていた。触手は炭治郎の胎の淫蜜で濡れそぼり、クチュクチュと淫らな音をさせて緩急をつけて挿入を繰り返してくる。

(こ、これ嫌だ・・・なんか変だ、変なんだ・・・！)

胎の中で感じる愉悦を認められず、炭治郎はどこまでも快楽を認めない。しかし胎の中はすでもっと刺激を欲しがって、勝手に発情し始めてくる。

「そろそろ蕩けたか？これからお前に最上の快楽を与えてやろう」

すると両足の拘束が解け、炭治郎の下半身は自由になったが、無惨に膝裏から抱えられてまた動きを封じられる。その背中を踵で連続して打ったが、無惨は全く堪えていない。

「そろそろ覚悟はできたか？ヒノカミの巫子の身体がどれほどのものか、味わせてもらおう」
そう言つて無惨は炭治郎の秘孔に剛直を押し当て、少しずつ体内へ侵入していった。

「あぐっ・・・ああああっ！あっ！うあああ！」

入口がひどく引き攣れる激感があったが、巫子の身体は挿入で痛みを感じないように改造されている。特に胎から淫蜜がふんだんに分泌されていると、快楽の方が勝り、炭治郎を愉悦で狂わせてくる所業になっている。

しかし挿入された無惨のものは冷えていて、炭治郎は生き物に挿入されているという感覚がなかった。先ほどの触手の方が生き物感があり、改めて無惨に対してぞっとする。

しかしどんだん胎の中に突き挿れられ、炭治郎の身体が弓なりに反り返り、なんどもしゃくりあげる。

おそらく通常のサイズよりも大きいと思われる無惨の剛直が、炭治郎の鋭敏になつた体内を容赦なく抉り、胎内が激しく脈動し、炭治郎の身体も無惨に尋常ではない快楽を与えていた。

「ははっ、いいじゃないか、巫子の身体はさすがだな。好いぞ、もっと愉しませてくれ」

余裕の表情で汗一つ流さず、無惨は炭治郎を犯し続ける。

「うぐっ・・・ふ、う、うぐううっ！」

身体を犯される衝撃も炭治郎を追い詰めるが、初めてを奪われたショックにも追い詰められた。しかも、こんな憎い相手に花を散らされるとは、悔しくて喉元に熱い物が込み上げてくる。

しかし確実に炭治郎へ愉悦を打ち込んでくる無惨の身体は、初めて身体を交わすには刺激が強力すぎて、受け止めきれずに身体中を小刻みに痙攣させていた。

「ふあっ！あっ、あああ……っ！」

挿入されただけで身体が震えるほどだと言うのに、無惨は炭治郎の細腰を掴んで力を込めた。

「よし……動かすぞ……」

「あっ、だめだ、いつ今動かれたらああ！」

しかし無惨は有無を言わず炭治郎の中を暴き始めた。激しい上下運動に翻弄され、炭治郎が感じる激感は一層苛烈なものになる。

「あっ！あっ！おかしい、おかしっ……！あああ！これ、何っ……！んぐううっ！」

体験したことがない未体験の快楽に当惑し、それでも一方的に与えられる激感は止まらない。身体を律することもできず、ただ炭治郎は女のような声で可憐な喘ぎ声を上げるだけだった。

「ああっあっ！あっ！あ、あ、うあああっ！はっ、ぐっ……！んぐっ！んあ、ああああっ！」

雑音が熱を帯び、揺さぶられる体に合わせて上下にプルプルと揺れながら、先端から淫液をとめどなく吐き出している。触れられていないのに快楽が迫る感覚を覚え、炭治郎は自分の身体に巻き起こる『初めて』に混乱が止まらない。

「いやだああっ！も、本当にやめてくれ……っ！な、何か来るっ……！ああああ！」

「絶頂も知らないのか？まあいい。処女だと言うのに最初から絶頂できるお前に、ふさわしい快楽を与えてやろう」

そう言うのと無惨は炭治郎の腰を抱き直し、さらに激しく、深く抽挿を繰り返し始めた。

「はぐうううっ！あっ！あっ！あっ！奥、奥うううっ！」

内壁を擦り回されるだけでも意識が薄れるほどだと言うのに、さらに奥にまで侵入され、一番奥を突かれた瞬間、炭治郎の目の前に火花が散った。それが突き入れられるたびに訪れ、炭治郎は何も考えられず、ただ犯されるがままに叫び、身体を痙攣させるだけだ。

「うあっあああああああっ！」

炭治郎の雛先から、触れられていないのに白液が吐き出される。今はそちらで感じている場合ではないのに、快感が上乘せされて気が狂いそうだった。

（い、いつ終わるんだ、もう、限界っ・・・！）

炭治郎が涙を次々と流しながら、慣れない身体感覚を一身に受け、身体を妖艶にくねらせて感じまくる。歯を食い縛って激感に堪えるが、それだけで我慢できるほど生易しいものではない。

最奥を打たれるたびに胎の奥が尋常ではないほどの衝撃に包まれるが、息苦しさを感じるだけで、炭治郎はこれを次第に快楽だと理解し始めた。

「あっ、ああ、あっ、あっ、あっ、あああっ！」

炭治郎の声色が変わり、淫蕩に濡れた色に染まり始め、無惨の剛直を身体が勝手に愛おし気に締め付ける。

「こ慣れてきたか。さすが順応が速いな」

「んぐうううっ！」

無惨は炭治郎の腰の位置を変えて、剛直が胎で当たる部分を変更した。奥まで突かれるのは変わらず、目の前が白む激感は変わらないが、代わりに洞内の熱い一点を集中的に摩擦され、擦られるたびに涎が出そうなほどの快感がせり上がってくる。

「あああつ！あつ！そ、それやめろ！おか、おかしくなるっ！あああああつ！」

「おかしくなるものか。この程度でおかしくなっていたら、淫鬼喰らいの名が泣くぞ」

前立腺を集中的に責められ、胎の中にどンドン快感が蓄積され、炭治郎は我慢できない愉悦に顔を振り乱して涙を飛ばし、狂乱して甘い声を上げまくった。

「いやだあああつ！あああつあああつ！あつ、あ、あ、あつ！も、もうやめ、ふぐうううっ……！こ、これ以上……おかしく、する、なっ、あ、あああああああ！」

蓄積された快樂が分水嶺を超えた瞬間、炭治郎の胎はこれ以上ないほどに熱くなり、頭が真っ白になってあまりの激悦に手足を小刻みに震わせ、見開かれた瞳から涙を幾筋も流し、息もままならなかった。

「——っ！」

広げたハンカチにコップの水をぶちまけるように、圧倒的に吸収する量よりも多い快樂をぶちまけられ、炭治郎の性感と意識を殴打する。

あまりの激感に炭治郎は息をするのも忘れ、震える口を広げながら、あ、あ、と声を絞り出すのが精いっぱいだった。

震える炭治郎の身体に覆い被さり、耳元や首を舐め、無惨は言う。

「初めての絶頂はどうだった？その様子では相当よかったようだな。人間との性交では決して味わえない快楽で、初めての絶頂を迎えられたことを感謝しろ」

「はあ、はあ、はっ、はっ、ああっあああ……っ」

ようやくまともに息を吐けるようになった炭治郎に、無惨は告げる。

「この身体、私と相性が好いようだ。私が達するまで、愉しませてやるぞ」

それから炭治郎は休む間もなく絶頂を極めさせられた。無惨は炭治郎の弱い箇所を見つけてはそこを執拗に、重点的に責め、刺激することを繰り返して、何度も絶頂を迎えさせる。

雛先から吐き出される白液も色を失い、透明の潮が止まらない。何度も絶頂で気を失っては無理矢理起こされるのを繰り返して、無惨はようやく満足げに言った。

「大したものだな、炭治郎。この私が、人間相手に射精するなど初めてだ。ありがたく私の精を受け取れ」

「あ、うっあ、ああ……！」

言葉もまともに発せなくなつた炭治郎を揺さぶり続け、無惨は無慈悲にも炭治郎の胎の中へと陰気の塊である精を思う存分吐き出した。

「——っ！あ、あああ——！」

声を枯らした炭治郎が一際大きな声を上げて極悦を叫ぶ。胎の中に硫酸を入れられたように熱く、内壁に陰気が沁み込み、我慢し難い愉悦が延々と続く。

「はあっ！はあっ！はあっ！はあっ！」

身体中を滴るほどの汗で濡らし、口の端から涎を幾筋も垂らして、犬のように荒い吐息を吐き続ける。心音の限界を迎えた様に胸は高鳴って激しく上下し、縛られた手足も、拘束が無ければ暴れ狂っているほどの激悦を、炭治郎はじつくり味わわされていた。

「くううっ……うっ……あっあ……」

胎の陰気がたふんと揺蕩つた音を聞いたような覚えを最後に、炭治郎は耐えきれず気を失った。

「巫子、まだまだ、もっとお前に陰気を注いでやる。起きろ」

炭治郎の絶頂淫獄は、そのあと3時間続いた。

※※※

転校してから翌日。

「おい炭治郎！職員室にめちやくちや可愛い子が来てるらしいぞ！」

今日の授業の始まりに、炭治郎は教科書をカバンから出しながら、興奮した善逸から話を聞いていた。

「え？職員室に？」

「うん！中等部の子らしいんだけど、ここに兄貴がいるとかで、探しに来たらしいんだ！」
それを聞いて炭治郎は嫌な予感がした。

「今ならまだ職員室にいるかもしれないから、見に行かねえ？」

息巻く善逸を尻目に見て、炭治郎は両手を向けて拒否の仕草をとった。

「俺はいいよ・・・もうすぐ授業始まるし、興味ないし・・・」

「はあ？めちやくちや可愛いらしいぞ！中等部らしいから、今会っておかないと次に会えるのはいつになるかわからないんだぞ！この唐変木！」

（唐変木と言われてしまった）

綺麗な顔なら昨日嫌と言うほど見た、と炭治郎は思いながら、善逸に手を引かれ、強制的に職員室へ連れて行かれた。

同時に嫌な予感が当たってくれるな、と願いながら炭治郎は廊下を進むが、職員室の前には野郎どもが期待を込めてドアの前に整列している。

本来性的に淡泊な炭治郎は、同い年ほどの少年たちが、美少女を一目見ようと息巻く姿は異様だった。

（顔だけよければいいのか？）

人の内面を見ず、外見だけで好意を寄せられると、好きだと言われても気分がいい物ではない。

顔目当てなんて不純だ。身体目当てなんて、もっと不純だ。

するとにわかには職員室の中が騒がしくなり、男子たちはいよいよ美少女の登場かとざわめき始める。

そして職員室の引き戸から出てきた少女は、男子たちの期待を裏切らない、いやそれ以上の可憐さで彼らを迎えた。

長髪をリボンで結んで額を出したその下には、桃色をした大きな目が絶妙な位置で配置され、瞬きをする
と「パチパチ」と音が出そうなほどに、睫毛も長く、少女らしく幼い鼻梁にふっくらとした淡い唇。足元

まである長い黒髪は、途中からオレンジに染められて少女の可愛らしさを引き立てる。TVで活躍している集団女子グループの中に入れば、確実にセンターを狙える美少女ぶりだった。

男子たちは一斉に「かわいいい〜！」と語尾にハートマークを飛び散らせ、ちよこんと立ち尽くす少女の全体を眺める。

ほっそりとした身体に、スカートからすらりとした脚が伸び、小さな足のサイズがまた可愛らしい。

しかし美少女は男子たちの態度に慣れているのか、戸惑う様子もなくにつこりと微笑んで、男子を悶えさせる炸薬を投下し、彼らをその場に釘付けにすると、踵を返して職員室のドアから遠ざかる。

そして、廊下の向こうにいる人物を見て、美少女は大きな目をさらに大きくして、喜色を浮かべて駆け寄った。

「お兄ちゃん！」

善逸に無理矢理連れてこられた炭治郎だったが、いきなり美少女に腕へ抱き着かれて困ったような顔をした。

「ね、禰豆子なんで・・・」

「だってお兄ちゃんが心配なんでもん！私も一緒にいいいでしょ！」

そう言うて目をキラキラ輝かせる妹を怒鳴ることなどできず、炭治郎はため息をついた。

ふと隣の善逸を見ると、鬼神と言える視線をこちらに向けていて、炭治郎は身体を小さく跳ね上がらせた。

「ぜ、善逸・・・」

「お前・・・その子と知り合いなのかよ・・・！」

これまで聞いたことがないぐらい低い、怨念のこもった声だった。

「いや、その、誤解だよ・・・禰豆子は俺の」

「良い御身分だな！」

いきなり胸倉をつかまれた。善逸の目は血走り、普通の鬼より恐ろしい形相になっている。

「俺が女の子とラインの交換すらできず、出来ても未読無視されて話しかけることもできない！日々悶々と過ごしている中、お前はくそリア充だったのか！しかもこんな可愛い子と？彼女持ちなら先に言えよ！俺が虚しいだけじゃないか！」

一気に捲くし立てる善逸の迫力に押され、炭治郎は言葉を挟む隙すら無い。

「お兄ちゃん、この人誰？」

ますます炭治郎にくつつき、訝しそうな目で禰豆子は善逸を眺める。

「俺の前でイチヤイチャするんじゃないか！」

イチヤイチャしてませんけれど！それにさつきから「お兄ちゃん」って言ってるじゃないか、何を善逸はこんなに怒ってるんだ。

「待て善逸、禰豆子は俺の妹だ」

「はあ？全然似てねえじゃねえか！お前の地味な顔とその子の血が繋がってるなんて信じられんわ！天誅！」

善逸は手刀を振り上げ、炭治郎の頭に振り下ろそうとした。頭か。たぶん善逸の方が痛い目に遭うだろうな、と炭治郎は考えながら、甘んじて彼の怒りを受けるつもりだった。

しかし手刀が振り下ろされることはなかった。可憐な容姿の禰豆子が、その腕を掴んで止めたのである。「お兄ちゃんになにするのよ・・・」

禰豆子の掴む腕の力がどんどん強くなってゆく。桃色の目の瞳孔が徐々に縦細くなり、可憐な顔面にはピキピキと血管が浮き上がり始めた。

徐々に増す痛み善逸が顔を歪め、痛い痛い！と、とうとう叫び声をあげ、そこでようやく禰豆子は手を離した。

「とうわけで、妹の禰豆子。竈門禰豆子。これからよろしくな、善逸」

禰豆子に掴まれた腕をさすりながら、善逸は半泣きで「はい」と返事をした。なんとも情けない姿に、炭治郎でも哀れに思う。

「禰豆子、ちよつと話があるから二人でいいか？」

「いいわよ？じゃあ、ちよつとお兄ちゃん借りますね」

先ほどとは天と地ほど違う天使の笑顔を向けて、禰豆子は炭治郎の腕を掴んで廊下を歩いた。

廊下を二人で連れて歩くと、周囲から「可愛い」「超美人」などと羨望の眼差しと賛辞を掛けられる。我が妹が周囲に褒められるのは兄として鼻が高いが、これではゆっくり話をするどころではない。

「隣の人だれ？」「彼氏？」「ぱつとしないわね」並んで歩く炭治郎を見定めてズケズケと言う女子たちには、禰豆子はしっかり唇を尖らせて睨みを利かせた。美人の怒る顔は怖い。

炭治郎は禰豆子を連れ、掃除用具室へと入った。

掃除用具が所狭しと並べられている埃臭い部屋だが、歩きながら話するのは不可能だと思い、炭治郎はこの部屋を選んだ。

禰豆子と向かい合うと、兄の厳しい顔で向き直る。

「禰豆子。どうしてお前がこの学園に来たんだ？」

「・・・お兄ちゃんのサポートとして」

炭治郎の視線を跳ね返すように禰豆子も答える。そして胸ポケットから一枚の札を取り出し、炭治郎に見せつけた。その紙片は筆文字で「竈門炭治郎 補佐 竈門禰豆子」と書かれ、上に赤い花押が押されている。ヒノカミのエージェントとして認められた証明だ。

炭治郎は深いため息をつき、首をゆっくり左右に振った。

竈門家は代々退魔師の家系だ。しかし退魔行を行うのは長男で、ヒノカミ神楽の伝承を受け継ぐのは炭治郎だけだ。そして家族はヒノカミの巫子となった長男の仕事をサポートしたりするのは至極当然なのが・・・

(禰豆子には危ない目に遭ってほしくない)

※※※

2時間後、炭治郎は無惨の仰臥した身体の上へ重なるように仰向けで乗せられ、胎を穿たれながら雛先を両手で蹴られ、延々と射精絶頂を繰り返していた。

「あううっ、はあ、ああああ・・・っ」

無惨の両手にはキバの生えた口が存在していて、中から巨大な舌が伸び、何もしなくても後ろを犯しているだけで射精している炭治郎の雛先を、これでもかと執拗に舐め回していた。

じゅぷじゅぷと秘孔を穿つ水音に、ぐちぐちと雛先を責める音が重複する。炭治郎の身体からは、淫鬼を誘う甘い花の匂いがしている。しかし当人は、あまりの極悦の連続に半分意識を失いかけ、性的な刺激に反応するだけで、裏返った艶声を上げるしかできていない。

無惨は手心を加えることなど一切せず、炭治郎の胎内を犯している無惨の剛直からもいくつもの舌が生えて、敏感な内壁を舐め回し、前立腺の裏を容赦なく舐め抉って、上下の運動の上に左右に激しく捏ね回したりする。

「はふっ、ああ、あああつ、あ、あ、ああ・・・」

射精の激悦も最初の頃から一切変わらず、おぞましいほどの極悦で炭治郎の思考能力を削ぎ続ける。

処女を散らして5時間で、人の一生分の快楽を凝縮したような濃厚な凌辱を受け、炭治郎は自分の精液にまみれてドロドロという被虐の有様だった。

「炭治郎、気持ちいいか？」

ずっと犯し続けている無惨に疲労は全く感じられず、力強い勢いで胎内を穿ち続ける。腰を振りたくって洞内を削るように荒らし、じゅぼじゅぼと淫らな音が止まらない。

「んんっ、あ、あああ、あ、ああっあああ——！」

胎内へ数十度目の射精をされ、胎に溜まった無惨の精液が炭治郎の精液として吐き出される。まだ胎の中は無惨の精液でひたひたに溢れ、全てを出すにはもう5時間は必要な量だった。

「気持ちいいな？炭治郎。こういう時は気持ちいい、とはつきり言うんだ」

背後から炭治郎の耳を甘噛みしながら、無惨が呪詛のように炭治郎にしつこく語り掛ける。

「はああ！いい、いい、気持ち、いい、あ、あ、あああああつ！」

炭治郎の雛先から勢いよく白液が吐き出される。幼い身体が痙攣絶頂し、落下しそうな炭治郎の身体を下から抱きかかえて支え、無惨は腰を使い続ける。

「はあ、はあ、ああ、あ、ああ、あつ、ああ・・・」

気が遠くなる極悦が続きすぎて、下半身が自分の身体だと思えないほどに感覚が乖離してしまっている。しかし絶頂するたびに全身に甘い痺れが走って体中が蕩けそうになり、足のつま先から舌尖、髪の毛の先までを甘美に包み、愉悦に酔わされる。

「炭治郎、いいな。お前は実に好い。まだまだ調育の余地があるな。これからが楽しみだよ」

「ひあつ！ふああつ！あつ！あつ！あつ！あああああああつ！」

無惨の腰遣いが一気に激しくなり、炭治郎の身体がめちやくちやに振り乱され、胎内を激しく攪拌されて絶頂から降りられない。

「あああつ！はあ、はつ・・・つ、あ、あつあああああ——！」

ぶちゅぶちゅと音を立てて胎内へ大量の精液が吐き出され、人間離れした長い射精に炭治郎の身体が絶頂痙攣を終えられない。

「うぐつ・・・！う・・・あ・・・」

ようやく炭治郎の中から無惨の凶悪な剛直が引き抜かれ、胎内絶頂から解放される。

しかし引き抜かれても5時間に及んだ凌辱の感覚はなくならず、ずっと胎内を抽挿されている感覚が続き、何もされていないのにまだ絶頂が止まらない。

「少し休ませてやろう。そのあとまた、可愛がってやる」

そう言つて無惨は、ベッドの上で涙を流しながら、精液を吐き出し続ける炭治郎を見下ろし、その場から消えていった。

「はあ、ああつ……！これ、止めつ……！あああああ——！」

炭治郎の射精絶頂が終わるのは、それから1時間後のことだった。

※※※

う言われて指示されたエレベーターは遠い。というか、このホテルのフロント広すぎる。何本もの太く豪華な柱に、全面ガラス張りの様相は二階まで続いていて、二階へ続くエスカレーターまである。

上の方からコーヒーや食べ物匂いがあるので、二階がレストランなのだとわかったが、それにしても炭治郎が訪れたホテルの中で、これほど高級感があって広いホテルはない。

(俺こんな格好で恥ずかしいなあ)

自分の衣装を鑑みて市松文様の羽織で身体を隠すようにしながら、エレベーターへ乗り込む。エレベーターの一面もガラス張り、上に行くにつれて街の様子が映し出される。

(綺麗だな)

高いところから見る街の火の輝きが美しく、上から見る景色は壮観だった。

指定された階は最上階から一つ下らしく、それでも十分景色を楽しめる高さに炭治郎は息巻いてエレベーターから降りる。

踏んでしまうのが申し訳ないほど、毛足の長い絨毯が廊下に敷き詰められている。炭治郎は恐縮しながら言われた102号室を探したが、この階には二部屋しかないらしい。

(噂のペントハウス？でも、最上階じゃないし……)

何が何だかわからないが、とりあえずフロントの女性が説明してくれた通り、QRで読み込んだアプリを起動させて、『開錠』ボタンを押すと、ガチャ、と無機質な音がしてドアの鍵が開かれた。

開けた先には、朝まで炭治郎がいたアパートの1Kが二つ並んで入るほどの玄関があって、ただただピカピカのフロリングが広がっている。

(ん?)

しかしそこで、炭治郎の鼻が異変を察知した。誰かいる。

判然としない香りだが、ただ人間の匂いがある、とだけ感じる。その方向へ進み、大きな引き戸を開けると、そこはガランとした空間だった。

しかし右奥を見ると、並べられたソファに、画面の映っていない大型TV。さらに、そのソファの上には人が座っていて、黒髪が見えた。

炭治郎が驚いて名前を呼ぶより早く、黒髪がこちらを振り返る。

「遅かったな。待ちくたびれたぞ」

「と、と、富岡先生！」

肩にかけてカバンを取り落とし、炭治郎は叫んだ。

「なんだその恰好は。制服はどうした？」

炭治郎の神装姿を見て義勇はソファから立ち上がった。テーブルの上にはノートPCがあり、それを閉じながら義勇は炭治郎に近づく。

いつものジャージ姿ではなく、ライトグレーのシャツにGパン姿だ。ジャージに比べて身体のラインがわかる格好だが、それでもモデルのように様になっていて申し分ない。黒紐を通した琥珀のペンデュラムネックレスをしているのがまた似合う。

「いや、あの、協会から、今夜からここに泊まれて……！でも違いますよね！すみません！何かの間違ひみたいですよ！」

炭治郎は両手をせわしなく動かして大仰に動き、最後に背中を向けて出て行こうとする。

「いや、間違っていないぞ。お前は今日からここに住むんだ」

炭治郎が振り返って、え？と聞き返すと、義勇は面倒くさそうに壁へもたれ、説明した。

「ヒノカミ協会から一緒に住んでくれないかと打診があった。俺も部屋が余ってるし、お前と修練もできるから了解した」

「俺の了解は……？」

「知らん。文句ならヒノカミ協会へ言え」

そう言うとき義勇は炭治郎が落としたカバンを拾い、目の前を横切つてゆく。

「あ……」

「お前の部屋に案内するからついてこい」

「このお部屋つて何畳ぐらいあるんでしょう？」

明らかに義勇一人では持て余しているリビングを見て、炭治郎が尋ねる。

「さあな。60畳ぐらいじゃないのか？」

「60！」

炭治郎が驚いているのに構わず、義勇はリビングから続くドアを開け、歩いてゆく。炭治郎が続くと、そこも1Kが余裕で入る広さでカーペットだけ敷かれ、寒々として何も置かれていない空間である。ただし、微妙にカーブした階段がある。義勇が階段を登っていくので炭治郎がついていくと、上がつてすぐ、ドアが無い、また広い部屋があった。そこにはダブルベッドと机、何故かキッチンにバーカウンターまである。そして広い床の上に段ボールが一箱あるのを見つけた。

「お前の荷物だ。今日からここがお前の部屋だから、好きに使え」

そして義勇は炭治郎の足元を見ると、舌打ちして炭治郎の赤毛に手を乗せた。

「土足じゃないか。なんで玄関で脱いでこなかった」

言われてみてようやく気付いたが、炭治郎は神装の草鞋を履いたままだ。

「あっ！すみません！」

慌てて脱ぎ始めるが、あの広い玄関のどこに靴を脱ぐとこがあったんだ？と思いつながら草鞋を脱ぐ。その間、義勇が急に近づいて炭治郎の顔を覗き込んできた。

「な、なんですか？」

急に綺麗な顔で見つめられ、炭治郎の心音が上がる。

「・・・鬼と闘ってきたのか。どうやらまた手こずったらしいな」

義勇は無表情な声で言ったが、炭治郎はまた馬鹿にされたような響きを感じ、むっと黙り込む。しかし炭治郎の心の変化など気づかないらしい義勇は、続けて言う。

「身体の精気が乱れてるぞ。というか、ぐちゃぐちゃだな」

悔しいが、義勇の言っていることは当たっている。

自分がもともと持つ靈気に、女霊たちの陽気、善逸の迅雷の精気、羅馬鬼の陽気。

「整えてやろうか？」

そう言つて義勇の顔が炭治郎に覆い被さってくる。

（キスされる！）

察知した炭治郎は神速で義勇の口に自分の掌を押し当て、口づけを塞いだ。しかし、掌に生温かい感触を感じ、ひえ、と慌てて手を離す。

「な、舐め・・・！」

顔を朱くした炭治郎が反応するより早く、義勇が顎を取って引き寄せると今度は口づけを果たした。

しかし義勇が舌を入れようとしたところで、炭治郎はその肩を両手で弾き、自分も後方へ飛びさる。

「や、やめてください！修行のお相手はしないって言ったでしょう！」

二人はしばらく見つめ合ったが、義勇が、ふん、と先に折れて炭治郎に背を向けた。

「二階の玄関はそこだ。あと、廊下を出たところにクローゼットが二つあるが、左がお前のだ。適当に服を並べておいたから、適当に着ろ。廊下の突き当りがトイレと風呂だ」

それだけ言うと、義勇は階段を降りて行こうとした。

「富岡先生はどこで寝るんですか？」

「義勇と呼べ」

「・・・先生は！ど・こ・で・寝るんですか！」

義勇は答えない。子供か、と思いいながら炭治郎はしぶしぶ言った。

「義勇さん・・・寝るところ・・・」

「俺はいつもリビングのソファで寝てる」

それだけ言うと、階段を降りてリビングへ引っ込んでしまった。

炭治郎はまた1Kに越してきてしまった。しかし今度の1Kは、30畳近くもある広い1Kで、ダブルベッドがあつて、絨毯が敷かれていて、キッチンにバーカウンターまで付いている。

（広すぎて落ち着かない！）

炭治郎は頭を抱えたが、目の前に足袋を穿いた自分の足が見え、そういえば神装のままだったと気づき、段ボールを開いて部屋着を探すと、神装を解いて制服を脱ぎ、Tシャツとハーフパンツの部屋着に替える。

そういえばズボンには善逸にくれてやったのだ。明日はどうやって登校しよう。思案しながら、炭治郎はマシヨンの探索を始めた。

右が義勇、左が自分・・・と言われたが、廊下を出てもクローゼットなどない。ただ、恐ろしく間隔の空いた二つのドアがある。

炭治郎が左の部屋を開くと、そこにはまた広い空間が存在していた。一室として、十分寝れる。

(クローゼットって簡単に言ってたけれど、これクローゼットの『部屋』じゃないか！)

部屋の片面はガラス張りになっており、ここからも都会の夜景を見下ろせる。しかし今の炭治郎は、呑気にキレイダナーと街を眺める気分ではない。

他の面が全て締め切られたクローゼットになっており、その一面を恐々開いてみると、ビニールのかかった洋服がずらりと並び、足元には新品の箱が積み重なっている。

(高そう・・・)

炭治郎はなんだか自分がものすごく悪いことをしている気分になって、ハンガーにかけられた洋服を見ていると、一角に同じ柄が並んだ部分を見つけた。

一つ取り出してみると、キメツ学園の制服一式が何着かあった。ズボンもちゃんとあり、炭治郎は安心して。試しに穿いてみたが、サイズはぴったりである。

まるで炭治郎が、これから服を破損していくのを見越して用意したような数が並べられ、複雑な気分になった。

クローゼットの端には姿見があり、これで自分に向けた意識系の術がかけられるようになっていいる。パタパタ開くと、大きな三面鏡になった。

炭治郎はクローゼット部屋を出て、風呂とトイレを確認しに廊下を進む。左に出入り口のドアがあり、段差がついて靴を収納できそうな棚があったから、ここが二階の玄関なのだとわかった。たぶんこれが標準家庭用の玄関だ。下のは規格外すぎる。

突き当りに風呂らしき半透明のドアがあり、開いてみると左に大理石で作ったような二つ並んだ洗面台、右に洗濯機とタオルの棚がある。そして、風呂へのドアは透明で、ここから円形の広い風呂が見えていた。

(広っ！デカっ！ジャ、ジャグジーってヤツか？)

炭治郎が感動して眺めていると、途端にゴボリと音を立て、その直後に湯が並々と注がれてゆく。

(えっ？俺なにもしてないよな？)

急に湯張りを始めたジャグジーだが、炭治郎は「凄い」と一言感嘆の声をあげ、子供のようにはしゃいで早速服を脱ぎ始めた。

湯はまだ完全に満たされていないが、炭治郎はすでに裸になってジャグジーに滑り込む。

(凄い、足が伸ばせる)

修業時代は五右衛門風呂で、昨日のアパートは膝を抱えてようやく入れる大きさだった。もともとお風呂が好きな炭治郎は、久々に心身共にリラックスし、深く満足のため息を吐く。

赴任して二日目だというのに、もうすでに三体の淫鬼を浄化した。この数の量は異常すぎる。自分の身体の奥に巢食う無惨の陰気がぬるくざわめき、炭治郎は胎を上から撫でながら息を吐く。

善逸にもらった迅雷の精気のおかげで陽の気は保たれているが、身体の中が乱れているのは確かだ。明日の朝、日光浴をしてちゃんと整えよう。

そう思いながら、炭治郎はふとジャグジーの壁に気づいた。黒くて四角い液晶画面があるが、その隣に外へと繋がる大きなガラス窓がある。

身乗り出して覗いて見ると、かなり広いテラスがあった。広すぎて、シャツルランができそうだ。(ここから出られるのかな?)

ガラス窓を探っていると、急に入口のドアが開いて炭治郎は飛び上がった。

「なんだ、もう先に入ってたのか」

「と、とみ・・・!」

全裸の義勇がジャグジーに足を付け、そのまま深く沈み、両腕を広げてジャグジーの縁に置く。

「あ、す、すみません、すぐ出ます」

しかし炭治郎は足首を掴まれた。そのまま義勇に引つ張られ、あやうくバランスを崩しそうになる。

「一緒に入ればいいだろう。大体この風呂は広すぎて、一人で入るのはつまらない」

義勇の手に、炭治郎が戻るまで離さない意思を感じた炭治郎は、広いジャグジーに体育座りをして沈んだ。

※※※

拘束された炭治郎の身体全体が小刻みに痙攣し、まだ始まったばかりだと言うのに炭治郎は激悦で意識を失いそうになった。

「巫子の身体はそんなに美味しいのかよ。今度は俺が愉しませてやる」

「俺の舌は凄いで・・・精々泣き叫んで絶頂しろ」

しかし新たな淫鬼が両足の間に入れ替わり、今度は舌と手を使って雛先を責め、さつきとは打って変わった柔らかい舌で秘孔を責められる。

「ううっ・・・ああっ・・・！」

さつきとは異なる感覚と快楽に炭治郎が嬌声を上げ、背中をビクビクと反らせて反応する。

「こっちはどうだ？もう調教済みか？」

囲む淫鬼たちが炭治郎の胸の桜色を掴み、ゆるゆると擦ってくる。

「んんっ！そこ、変・・・」

はあはあと荒い息を繰り返しながら、炭治郎は未知の快楽に声を上げる。下半身はこれ以上ないまでめ立てられたが、上半身は手つかずのまま残されていた。

「触られて感じるってことは、素質があるってことだ。どんどん開発して行ってやろうぜ」

淫気を含んだ鬼の指先が桜色をクルクルと撫で回し、妖しい感覚が上半身に走る。もう片方の桜色にも指が取りつき、優しい手つきで捏ね回され、炭治郎は上半身を痙攣させた。

「ああ、や、やめ・・・変、変だ、そこ、あっああ・・・」

「変じゃねえよ、気持ちいいんだよ」

「ここでもイケるようになってやるから・・・」

開かされた両足の前後を責められているだけで頭がおかしくなりそうなのに、これ以上快楽を感じる部分などいない。

しかし四肢を頑丈な力で拘束された炭治郎には、抗う術はなかった。

秘孔を弄んでいた柔らかい舌がぬるりと洞内に侵入し、いくら締めても難なく奥まで突き進んでくる。まるで流動物かのような熱い舌に最奥まで到達され、その熱さと快感に炭治郎は叫び声を上げる。

「熱っ……！ああああっ！抜け、抜けええ！」

しかしそのままぐるりと回転され、一気に達悦が訪れて、炭治郎の身体は甘美に痺れてしまう。

「ああっ……」

「蜜がどんどん溢れてくるぜ……どうだ？俺の舌は気持ちいいだろう？」

「こっちも忘れるんじゃないよ」

手と舌で責めていた淫鬼が、根元から先端までを手で激しく扱き、先端を舌で舐めしやぶるが、その舌の先端は糸のように細くなり、炭治郎の未成熟な鈴口に侵入し始めた。

「ふあっ！な、何！やめ、やめてくれ！」

またもや未知の感覚を与えられ、炭治郎は戸惑いの声を上げて激しく頭を左右に振りたくる。

鬼の舌が尿道をせり上がってくる感覚に炭治郎の腰がビクビクと痙攣し、たまらない感触に額から汗を流す。

舌はどこまでも伸び続け、最奥に達した瞬間、炭治郎は灼け上がるような熱を感じて身体を引き攣らせた。

「あああああああ！」

「奥まで届いたか？だが、これからだ……」

舌は最奥から少し引くと、また再び最奥を打った。

「ああああああ！」

突かれるたびに下半身が甘く痺れ、射精とそっくりの激感が訪れる。激しく反応する炭治郎が愉しいらしく、鬼は調子に乗って何度も奥を連続で突いた。

「あっ……ああ……だ、めっ、それやめ……ああああっ！」

背中が弓なりに反り返り、健康美を湛えた裸体を激しくくねらせる。まだ幼さの残る炭治郎の性感を無理矢理押し広げて、淫鬼たちは嗤う。

「気持ちいいんだろ？わかってるぜ……こんなに奥が熱くなってる……」

最奥に達した状態で舌先を上下に素早く動かされ、連続どころか継続の射精絶頂が訪れる。

「あっ！あっ！あっ！あっ！お、おかしく、あ、あ、なるっ……！」

無惨に味わわれた一時間にも及ぶ無限射精を思い出し炭治郎はぞっとしたが、同時に身体の奥が甘く疼いたのも事実だった。

ずるずると舌が引き抜かれる最中もずっと射精が続いている快感が続き、炭治郎が悶絶する。全てが引き抜かれた瞬間、雛先の先端から勢いよく白液が吐き出された。

「ああああ——！！」

普通の射精とは一段も二段も違う極悦を味わわれ、炭治郎が狂乱する。同時に胎を責めていた舌が捻りを激しくさせ、洞内も絶頂へと導かれてしまう。

「おかしくなる、おかしくなる！ああっあああああ！」

つぶつた瞳から涙を幾粒も零し、炭治郎は喚いて激悦を訴える。しかし鬼たちは当然聞くことはなく、炭治郎が激しく達悦し、身体中をビクンビクンと痙攣させているのを面白そうに眺めていた。

ようやく下半身の快楽から解放されたが、炭治郎はすでに虫の息だった。

瞳から涙をとめどなく流し、身体は快楽の余韻でそこかしこを小刻みにヒクつかせている。

しかしまだ舌輪姦は始まったばかりで、淫鬼たちの滾りを挿入すらされていない。無惨の快楽責めを耐えたとはいえ、炭治郎の身体は愉悦を覚えたばかりの13歳の少年だった。

「よし、次は俺だ！」

「俺もしゃぶり回してやる！」

炭治郎が止める声を上げる間もなく、次の鬼が広げられた下半身の性感帯にむしゃぶりつく。嫌なのに、胎からはキョクンキョクンと甘い感覚がせり上がり、秘孔から流れる淫蜜が止まらない。

糸舌で責められた雛先は、未だに射精絶頂の余韻を保っていて、可愛らしく反応したままだ。

「んあああつ！あああつ！もう、やめ・・・！！んぐううううつ！」

今度はザラザラした舌が雛先を舐め回し、粒の連なつた舌が秘孔を探る。

再び訪れた、おぞましくも甘美な瞬間に、炭治郎は汗に濡れた瑞々しい肌を仰け反らせて感じ入る。

「うあつ！あああつ！止めるっ・・・！」

しかしその声もすでに蕩け切り、抗う声にも力が全く入っていない。

炭治郎の下半身が快楽でもみくちやになっている時、上半身に注目していた淫鬼が、その桜色の突起に興味を示し始めた。

「ここはまだ手付かずか・・・でも感じるってことは素質があるな。俺たちの淫力で、イけるようにしてやるよ」

炭治郎は意味が分からず困惑したが、これから鬼にされる自分が自分を責めるさらなる手段になることを感じ取り、首を左右に振って拒絶の言葉を吐いた。

「い、嫌だ！これ以上なにもするな！おかしくなるっ！」

「いいじゃねえか、おかしくなっちゃまえよ・・・どうせ無惨様のペットになるんだろう？だったら、気持ちいいところはたくさんある方がいいぜ？」

炭治郎の桜色を指で優しく捏ね回し、それだけでぞくんと愉悦が込み上げてくる。

鬼の指先から二本の細い管が伸びたかと思うと、両方の桜色を軽く突いた。これから何をされるのかを想像した炭治郎は、引き攣った声で拒絶の言葉を喚き散らす。

「嫌だーっ！嫌だ嫌だ！」

「うるせえ餓鬼だな。気持ちよくしてやるって言ってるのに、全く甲斐がないぜ・・・」

すると先端から針を突き出した細い触手が、炭治郎の敏感な桜色に突き刺さった。

「っ・・・！！あっ、あっあ・・・！！」

痛みは一切ないが、胸を中心にして薬液が注がれる感覚が広がり、それはぶわあ・・・と胸全体に広がって、あまりの気持ちよさに炭治郎は頭を妄つとさせた。

「んんっ・・・ぐっ・・・」

顔を朱くして耐える炭治郎の様子を見て鬼が笑い、左右の桜色を同時にそれぞれの指で弄ぶ。片方は押し潰して離してを繰り返し、片方はクルクルと指を回して突起を責めていた。

「ふあああつ！」

炭治郎の上半身が反り返り、裏返った可愛らしい声が放たれる。鬼に打たれた薬液のせいで敏感になってしまったのは明らかで、これまでとは比べ物にならない感覚に、炭治郎が熱い息を吐く。

ぎゅっと抓まれただけで痛みギリギリの激感が走る。相当敏感になってしまったそこは、もう炭治郎の意思でどうにかなる身体ではなくなっていた。

「おらおら、こうすると気持ちいいだろ？」

揃えた四本の指で片方の桜色を上下に素早く摩擦され、涎が出そうな愉悦に、炭治郎は身を仰け反らせながら激しい反応を示した。

「はああつ！や、やめ・・・」

もう片方の桜色にも同じ愛撫をされ、逃げ場のない上半身の快楽に炭治郎は肌を痙攣させる。

「あああつ！ふあ、や、やめろ！おかしい、変だ、あああつ！」

「なんだイクか？イクそうか？」

「こつちも忘れるなよ、ほらほら・・・」

ザラついた舌を持った鬼が雛先を一層激しく舐めしやぶり、粒の連なった舌の鬼も激しい挿挿を繰り返している。

「あああつ！あつあああつあつあつ！あああ！」

下半身の絶頂感が一気にせり上がり、上半身の激感も無視できず、炭治郎は困惑していた。体中のどこにも快楽の逃げ場がなく、どこも身体の芯が熱くなる快感がせり上がってくる。

「まずはこつちをイカせてやるよ！おら、おらっ！」

秘孔を責める舌の動きが一層激しくなり、炭治郎の弱い部分を抉るようにして激しく責め立て、絶頂を一気に煽る。それと同時に雛先の舌も動きが巧みになり、汚れない色をした器官をこれでもかと責め立てる。

「ふああああっ！やめ、いやだ、やめろおっ！ああ、ああああああっ！」

雛先が先に絶頂を迎えて白液を吐き出し、次いで胎内から燃えるような熱い絶頂感がせり上がってくる。

「ああああああっ……！」

無理矢理開かされた炭治郎の両足が小刻みに痙攣し、前と後ろで迎える挟み撃ちの極悦に炭治郎の喉から艶めいた声が放たれた。

「だんだん興が乗ってきたか？いい声を上げるようになったじゃねえか」

「こつちも直にイキそうだ。くく、お前の身体、どんどん快楽に弱くなっていくな」

胸をずっと愛撫し続ける鬼に笑いかけられるが、炭治郎は下半身で迎えた絶頂の余韻と、胸でずっと感じる強烈な感覚に耐えなければならぬ。反抗する声も出さず、奥歯を噛み締めて必死に、迫ってくる何かを堪える。

（む、胸が熱い、んんんっ！なんだか、どんどん高まってきて……）

ぞぞぞ、と背筋を愉悦が走った瞬間、鬼たちが擦る手をさらに速め、桜色を責め始めた瞬間、炭治郎は胸が突然熱くなり、ぶわりと温かいものが広がって意識が薄れていくのを感じた。

「あああああ——！ああ——！ああっああああ！」

ほぼ同時に両胸で迎えた絶頂感に、炭治郎は身体を大きく仰け反らせて汗を飛ばし、派手に快樂を訴えて狂乱する。

「よしよし！ようやく胸でイッたぞ！」

「さすが巫子様は素質があるなあ！」

「ほらほら、気持ちいいだろう？」

炭治郎の桜色を軽く引っ張っては離す行為を繰り返し、その幼い身体をヒクヒクと痙攣させる。

（なんだこれ・・・波が・・・なかなか引いて行かない・・・）

これが鬼たちの言う胸の絶頂なのかどうかは定かではないが、始まりがあつて終わりがあつて絶頂と言ふのならば、この感覚はそうなのだろう。しかし、雛先の快感と違って、絶頂してもすぐに身体が快樂から解放されない。まるで胎で極めたときのように、敏感で、ずっとゆるゆると快樂が留まっている。

「んっ・・・ああ、はあ、やめ・・・」

自分の口から出るのは、鼻にかかった女のような声だった。それに激しい羞恥を感じるが、今の炭治郎には精一杯の拒絶だった。

「チンポもケツも十分ほぐれて楽しんだろ？そろそろこっちも愉しませてもらうぜ」

※※※

「あらあら、そんなに慌てちゃって・・・大丈夫よ、あなたたちは殺さないわ。ただ、これから嬉しいシヨールに参加してもらおうわ。それだけで解放してあげる！」

すると窓からの光を塞いでいた糸が一部途切れ、スポットライトのように一点に光が差す。そこにはメイド服を着た人物が立っていた。

明日の模範店で女生徒たちが着るメイド服だ。黒いひざ下のスカートに、パフスリーブの長袖、胸元に大きな黒のリボン。その上にレースをあしらった白いエプロン姿に、頭には猫耳の白レースを付属させたカチューシャを着けている。

メイド服を着ている人物は女子にしては少し体格が良いが、顔は抜群に可愛らしい。

大きな赫い瞳に整った目鼻立ち、短い赤い髪をしていて左の眼の上に大きな痣がある。しかし、その痣だけでその少女の容貌の美麗を削ぐことはできず、何故か顔を朱くしたその様子が可愛らしく、艶めかしい。

「ほら、とつと言いなさい！」

どこからともなく聞こえてくる声が立ちすくむメイドの美少女に声をかける。少女は唇を噛み締めて一瞬悔しそうな様子を見せるが、意を決したように声を絞り出した。

「ご、ご主人様・・・私の・・・いい、いやらしい姿を見て、た、愉しんで、くだ、さい・・・」
耳を澄ますと、メイド服の赤毛少女から蠅の羽音のような音が幾重にも聞こえてくる。

「めぐりなさい、早く」

「うっ・・・くそっ・・・！」

少女は悪態をつくど、スカートの裾を掴んで、そろそろとゆっくり捲り上げた。そのスカートの中の様子を見て、男子たちは仰天の様子を見せる。

白いニーハイにはこれでもかと手動スイッチが詰め込まれ、そのコードは両足や腰回りを通って背後に伸びている。何より、少女には女にはありえない陽物があり、無毛でピンク色をした器官は反応しきり、光に当たって濡れているのが見える。

両足はブルブルと震え、立っているのがやっとという雰囲気だ。

ローターと思わしき淫具のスイッチが勝手に強弱を変え、女装の少年を身悶えさせる。

「んんっ！はあ、はあ、はあっ！」

荒い息を吐きながら身体を震わせ、額から汗を滴らせている。気のせいか、女装少年から甘い華の香りが出て、男子生徒たちの鼻孔をくすぐった。

「ほら、回らない」

またどこからともなく女の声が飛んで、女装少年が歯を食い縛ってゆっくりとその場で回り始める。

腰上まで上げられたスカートの下は下半身が丸見えだ。背中を向けて臀部を見せたとき、男子生徒たちの視線はそこへ釘付けになった。

ニーハイに詰められたローターのコードが全部秘孔に入り込んでいて、さらにそこには黒猫の尻尾が付いたパイプが突き挿れられている。

尻尾は激しい振動で上下左右に揺さぶられ、本物の猫のように蠢いている。

複数のローターを挿入されているだけで堪らないのに、上からさらに刺激を上乗せされ、腰は甘く痺れて足から力が抜けそうになる。

(くそっ、誰だこんなもの学校に持ち込んできたヤツ・・・！まだ未成年だろう！)

顔を真っ赤にして荒い息を吐きながら、炭治郎は見えない誰かに怒りをぶつける。蜘蛛女たちは「あんたたち生徒が持ってきたものよ」と言いつて並べてきたが、こんな不埒な道具を学び舎に持ち込むなんて信じられない。

電気で動く性具は修行中に見せられ、時折知識の一つとして使われたときもあったが、炭治郎は快感の堪え方がわからなくて苦手だった。

それなのに、今はこんなにめちやくちやに胎の中に何個も挿入され、さらにバイブを挿れられるという初めての経験に戸惑いながらも、確実に感じる、我慢し難い愉悦に身体を震わせていた。

「お、おい男だぜこいつ・・・」

「なんだ、変態か？」

「俺たちを縛っておいて、何見せてくるんだよ！」

「キモイぞ！」

男子生徒たちから罵声が飛ぶ。そりやそうだろうな、と炭治郎は思ったが、自分が今やっている痴態も本意ではない。彼らを守るために強要された見世物だが、救うべき人間たちに罵られるのは案外傷つく。

「ほら、次よ！」

(くそ、こいつら絶対許さない・・・！)

快感に流されそうな炭治郎は心に密かな怒りの炎を灯し、恥ずかしさで消えたくなりそうなほどのこの状況から、さらに恥ずべき行為を強要される。

「ご……ご主人様、どうか、わ、私の、私の……」

堪らなく恥ずかしい。自分でも耳まで顔が朱くなるのがわかるし、やりたくない。しかし、男子生徒の命を握っている鬼たちに逆らうことはできなかった。

「は、恥ずかしいところを……見てください……」

消え入りそうな声で辛うじて言って、炭治郎はニーハイに食い込んでいるローターの一つを取ってスイッチを入れると、正面を向いて自分の雛先に先端を当てた。

「うああっ！」

予想以上の感触が敏感な雛先を震わせ、炭治郎は手を引つ込めてしまう。思っていたよりもずつと感じる。これを使って自慰をしるなど、とんでもない要求だ。秘孔に突き挿れられている衝撃だけでも腰が砕けそうなのに、これ以上快感を詰め込んだら間違いなく簡単に絶頂してしまう。

(うっ……くそっ……！)

炭治郎はスカート下の裾を片手で大きく捲ると、もう片方で雛先にローターを当てる。

ヴヴヴツといやな音を立てて震える淫具を敏感になった雛先の表面に当てる。

こんな小さな装置なのに、ここまで感じるのか、と思えるほどの快感が走り、炭治郎はスカートの裾を離しそうになってしまう。

「ん、んんっ！んんんっ！」

なるべく喘ぎ声をとめようと努めるが、炭治郎はもうギリギリだった。先ほどから秘孔にずっと振動を与えられ、バイブで蓋をされて、最奥でローターが何個も暴れまくっている。

胎奥の結界にまでは届いていないが、前立腺を激しく責められて、足から力が抜けそうになり、皆の前ではしたなく絶頂を迎えそうになる。

「ふーっ、ふーっ、ふーっ……」

恐る恐る雛先にローターの先を近づけてくつつけるが、感覚が強すぎて少し触れただけですぐに離してしまふ。

「ほら何やってるのよ巫子！しっかりしないと全員殺すわよ？」

(勝手なことを……！)

しかし『殺す』と脅されては炭治郎も従うしかない。顔を真っ赤にして赫い目を潤ませ、胎の振動に耐えながら、もう一度ローターを近づける。

「ふあっ……！ああ、んぐぐっ……！」

雛先に細かい振動が伝わり、快感で腰が蕩けそうになる。雛先で感じることで胎も締めてしまい、中の激感を更に強く感じてしまい、前後で快楽が弾ける。

「おいお前！何やってんだよ変態！」

「そうだ、そんな事してるなら、とつと俺たちを解放しろ！」

「気持ちの悪いもの見せんじゃねえよ！」

「やめろよ！」

男子生徒からまたもや罵声が飛ぶ。当然だ。こんな異様な状況で、女装姿で現れて淫具まみれで登場し、ローターで自慰しているところを見せつけられているのだ。炭治郎が例え女生徒だったとしても、男子たちは罵声を浴びせただろう。

(ううっ、恥ずかしい恥ずかしい・・・)

悔しさと羞恥で瞳から涙が零れそう。自分の意思でやっているわけじゃないのに、身体も勝手に快感を拾って高まってしまふ。

「ほらほら、なにぐずぐずしてるのよ！とつとつやりなさい！」

するとローターのスイッチが勝手に弄られ、出力を上げられてしまふ。振動はさらに強くなり、炭治郎の洞内を激しく振動させ、性感帯の一点を激しく感じさせる。

「うあつ！あああつ！ああつああつ！」

ぞくぞくと愉悦がせり上がり、一気に跳ね上がった快感に炭治郎はどうとう膝を折った。しかし、見えないう糸が絡んで無理矢理立たされる。

(んんっ、も、もう無理だ！感じすぎてこれ以上できない・・・！)

雛先にあてがうローターを取り落とし、炭治郎はせまる胎の絶頂に激しく喘ぐ。黒猫の尻尾がつけられたパイプがローターの振動で左右に揺れ、本物の猫のような動きを見せる。広げられた両足の間からその様子は男子生徒からも見え、また罵声が飛ぶ。

「やめる！気持ち悪いぞ！」

「とつとつと助けるよ！」

「い、いい加減にしろ！」

しかし二十人ほどの男子の大半は言葉を発しない。炭治郎の痴態をじっと見つめて、中には生唾を飲む者までいる。

快楽に身悶える炭治郎は、同性ながら異常に艶めかしく見え、男子生徒たちの劣情を刺激しているらしい。

「うあぁっ！す、好きでやってるわけじゃ……！」

甘い声を上げながら弁解しようとする炭治郎に糸が絡みつき、スカートが勝手に捲れ上がって口に咥えさせられる。両手が勝手に動き、片手に持っていたローターはそのままに、もう一方の空いた手にもローターを握らされ、スイッチを入れると両手が動いて雛先を左右から責め始めた。

(りよ、両手が勝手に……！)

「んんんんっ！」

一つでも十分身悶えるほどの快感が走るのに、それを二つに増やされて左右から挟み撃ちにされ、全ての振動が雛先全体を包み、激しく震わせる。

思わず内股になって腰を引くが、秘孔にも数個のローターが入り、胎を激しく振動責めにかける。

(だ、だめだ、イク、こ、こんな大勢の前でっ……！こんな格好で……！)

閉じられた瞳から涙が零れ落ち、前後の快感で炭治郎は達してしまい、雛先から白液を吐き出した。

「うわっ！こいつ出したぞ！」

「こんな状況で……！」

男子生徒の罵声に隠れて、「うわエツロ・・・」「ヤバい・・・」と数人の男子生徒から眩きが漏れる。炭治郎の常人にはない色香漂う艶姿を目の当たりにし、健全な男子の身体は、同性ながら痴態を見せつけられて昂りつつあるようだ。

「まだまだ続けるわよ！霊力がからっぽになるまでやりなさい！」

秘孔に挿入されていた猫尻尾のついたバイブが突き上げられ、中のローターごと胎内深くへ侵入される。とうとうローターが結界近くに迫り、触れるか触れないかのギリギリでとどまっている。触れられながらこんな激しい振動を感じてしまったらイキっぱなしになってしまうだろう。寸でのところで回避できたが、その代わりに前立腺をゴリゴリと激しい振動責めにされる。

「んんっ！んんっ！んん——っ！」

腰の奥に灼けつくような快感がせり上がり、相変わらずローターで左右から責められている雛先から、また白液が吐き出される。

同時に胎の中でも絶頂し、叫び出したほどの激悦が訪れる。その強烈な快感に炭治郎の足はすっかり力を失っていたが、糸で無理矢理立たされ、両手も自在に操られ、快感を散らすこともできず一身で受け止めながら、羞恥の見世物を続けさせられる。

炭治郎の身体が痙攣し、額や背中に汗が伝う。巫子の汗が催淫の芳香になって教室内に散布され、男子生徒たちを虜にしてゆく。

「変態！人前でイッてんじゃねえよ！」

「そんなことしてる暇あったら俺たちを助けてろ！」

「やめろ、馬鹿！」

生徒たちからキモイ、気持ち悪い、と罵声を浴びせられるたびに、胸がキリキリ痛む。炭治郎も今すぐ止めたいが、当然そんなことは許されない。

「今度はお尻を見せてあげなさい」

糸が絡んで、もう炭治郎の意思など関係なく、身体を操作してくる。

足腰の立たない下半身に糸が絡んで動かされ、くるりと回って背後を生徒たちに見せると、スカートが大きく捲り上げられて淫具を飲み込んだ臀部を露出させられる。

この裸だけ見れば女子と見紛う美尻だが、その中心には猫尻尾のついたバイブが深々と刺さっている。

「言いなさい！ほら！」

鬼女に命令されるが、炭治郎は身体の快感を堪え、艶声を噛み締めるのに精いっぱい声一つ出すことができない。

「ほら猫メイド！猫らしく尻尾を振って鳴くのよ！」

猫尻尾のついたバイブに糸が絡んだらしく、胎内にまでその微細な振動が伝わってくる。

「こ、これ以上はだめだ、無理……！」

しかし炭治郎の拒絶もむなしく、糸は動き出す。バイブをぐるぐると大きく回し、黒猫の尻尾が大きく振り回されて円を描く。

「ああああああつ！」

※※※

空恐ろしいことを吹き合いながら、数人かの男子生徒が炭治郎のメイドスカートに手をかけた。

「あっ……」

これだけめちやくちやに乱されて、今更着衣を破かれるなど些細なことなのだが、一瞬怯んだ炭治郎の表情にますます盛り上がり、ものすごい力でスカートを破いてゆく。

フレアスカートの部分はほとんど取り去られ、ウエスト部分と臀部に敷かれた後ろのスカートだけ残してほとんど下半身を裸にされてしまった。

そしてますます、生足を隠す白いニーハイが艶めかしい。

「お、俺ニーハイ破いてみたい！」

「何言ってるんだ！下は裸で靴下だけ履いてるのがエロいんだろうが！」

くだらない喧嘩を始めた二人の男子を尻目に、他の生徒たちが炭治郎を取り囲み、再びその体に血気盛んな肉棒を突き出し始める。

「ほら、ちゃんとちんこ舐めてくれよ？でない全員でハメ潰すぞ」

「俺ケツもらい！ローターが入ってない生ケツだ……」

再び口に剛直を咥えさせられ、両手にもそれぞれ肉棒を掴まされた。リボンと袖だけ残して破られた上半身の裸にも、濡れた雄棒が滑りまくる。

（んんっ、熱い、身体中熱い……よ、酔ってしまいそうだ……）

充滿した若い男の精の匂いの中心にいて、炭治郎はむせ返るほどの匂いの中、顔を紅潮させて必死に奉仕を続ける。

「すげえフェラテク！めちやくちや慣れてるじゃねえか！」

「流石名門学園のメイドさんは違うなあ。ご主人を悦ばせる方法がわかってるよ」

ヒノカミの教義で習得した口淫の技で愛撫すれば、この程度の若い男子などすぐに射精させられる。しかし、いくら射精させても次々と口に突き込まれ、終わりが無い。

炭治郎の喉は精液に溢れ、愛らしい顔はすでに赤毛まで白液でひたひたに濡れてしまっている。ほぼ裸の上半身を滑る肉棒や男子たちの手が桜色にかかり、炭治郎の身体が跳ねあがる。

「なんだ、乳首感じるのか？」

炭治郎の胸は、昨夜の女霊の浄化で散々使い込み、今も敏感なままだ。口を塞がれているせいで返事ができないが、そこには今、触れて欲しくない。

（そ、そこだめ、触るな！）

炭治郎の赫い瞳が不安そうに動いて胸元を見ると、ローターを持った男子が桜色に密着させようとしている瞬間だった。

「んんっ！んんっ！んん——っ！」

細かいローターの振動が桜色に触れると、背中にもぞくぞくと痺れを感じる甘い感触が走る。精液にまみれながら、身体を仰げ反らせて反応するその姿は、生徒たちの獣欲を煽った。

「乳首弄ってたらちんこも気持ちよさそうにビクビクしてるぜ」

「ふあっ・・・やめ、そこはだめっ・・・！」

必死な声で制止を乞う炭治郎にかまわず、一人がローターで責められていない方に口を付けた。

「あああっ！そこ、吸わないで・・・っ！」

ローターの微細な刺激も感じるが、口や舌で弄られると身体のぞくぞくが止まらない。何も考えられなくなり、はあはあと愉悅の吐息が漏れてしまう。

（昨日の浄化で、凄く敏感になつてゐるのに、こんな風に責められたら・・・）

焦る炭治郎に関係なく、生徒たちは炭治郎の身体に群がり、遠慮なくわき腹や太腿に肉棒を擦り付けて両手で奉仕を求め、炭治郎の口を奪い合う。

「んっ！んっ！んんんっ！んっ！んん——！！」

（胸だめ、イク、だめ、イツたらなにも考えられなくなる・・・！）

しかしローターは強弱をつけて桜色を撫で回し、吸い付いた舌は先端を固くとがらせて桜色を上下に弾く。これだけで涎が出そうな快感なのに、身体中を淫まみれにさせられて、炭治郎は叫ぶ口も塞がれて身体を震わせるだけだった。

（んんんっ！だめ、イクっ・・・！こんな刺激ぐらいで、なんで・・・！）

上半身にぶわあ・・・と暴れだしたいほどの愉悅が広がり、炭治郎は胸を痙攣させて絶頂してしまい、その快感は下半身にも伝播して、男子の剛直で擦られまくっている雛先から白液を吐き出した。

「男に乳首イジられて射精なんてありえねーよな。どんだけインランなんだよ」

炭治郎の絶頂の様子を見て、男子たちが興奮しながら炭治郎の耳元で嗤う。上半身と下半身で絶頂を極め、炭治郎は、しばらく快楽に陶酔してしまつて、何も考えることができなかつた。

(あつ……こんな、イツてしまった……)

しかし次の刺激が炭治郎を責めてくる。

数人の男子の指が秘孔へいきなり突き込まれ、炭治郎は背中を反らせて悶えた。

「んんんんっ！」

奥に詰め込まれていたローターが無くなり、刺激が無くなったと安堵したが、炭治郎の身体はすでにローターの刺激に酔い、刺激が無くなると切なく疼きはじめていた。

(こ、こんな馬鹿な……！)

自分の身体に裏切られた思いで炭治郎は焦りを感じていたが、両足を大きく開いて男子の一人が猛った肉棒を秘孔に突き挿れようとした。

「んあつ……！」

自分でも驚くほど甘美な声もれ、それを男子たちが聞きのがすはずがない。

「おいおい、ケツにぶちこまれるのを待つてるのか？淫乱だなあ……」

(淫乱じゃないっ……！)

守るべき相手たちにいよいよにされるが、炭治郎は耐えなくてはいけなかつた。自分は凌辱に慣れている。この程度で挫けるか、と自分を鼓舞し、炭治郎は生徒の肉棒を受け入れる。

「んぐうううっ……！」

予想以上の快感が腰を走り、炭治郎は快楽のうめき声をあげ、思い切り喘ぎたかったが、その口も次々と突き出される剛直で塞がれる。

さらに奥まで侵入され、炭治郎は熱い雄の塊に下半身を痺れさせながら、快感に耐える。

「ふっ、ぐ、うう・・・っ！」

身体の愉悅に流されそうで、口淫を忘れてしまいそうだ。

ローターの刺激が無くなった、雄の持つナマの剛直を突き挿れられ、男子の陽気も直接入り込んでくる。

「んんっ！んんんっ！ぷは、はあ、あああっ！ああっ！」

胎の快感だけでも許容ギリギリだというのに、雛先や桜色まで弄ばれ、炭治郎は口淫を振り切って快楽の叫び声をあげた。

「こんな大人数に犯されてるのに、ちんこも乳首も勃起させて悦んでるなんて、変態メイドちゃんだな」

「はああっ！あっ！あっ！あっ！あああっ！」

そのまま腰を使って激しく挿挿され、ローターに占拠されていた奥を剛直で連続で突かれ、最も感じる胎、奥の結界に触れられて、我慢しようのない愉悅がこみあげてくる。

(だ、だめだ、奥を突かれると自制が効かなくなる・・・！)

「奥を突くたびにエッチな汁が溢れてくるぜ？」

「あんなに激しくやられてんのにまだ足りないのか？」

激しい腰遣いで炭治郎の身体がグラグラと揺さぶられ、口淫もままならなくなる。凌辱は初めてではないが、若い同年代の男に犯されるその激烈さと興奮の度合いに、炭治郎にまで熱が伝播しそうだった。

「はあはあ、すげえ、めちやくちや気持ちいい・・・こんなに締め付けてきて、嬉しいんだろ？中にたっぷり出してやるから、全部飲み込んでくれよ？」

炭治郎を犯し始めていた男子が、早々に射精を宣言し、一層腰遣いを激しくする。

※※※

「火急の手段です。恥ずかしさとか、そんなのは感じませんよ」

「俺にはファーストキスを奪われたと言って、喚いていたくせにか？」

それはプライベートで、善逸のはあくまで仕事だ。命に係わるあの窮地において、何を言ってるんだこの人は・・・と、炭治郎は理解できず、同時にそんな下らないことで怒ってるのか、と、案外器の小さい義勇に呆れながらも、この完璧人間に隙があることに気づけて、少し面白くなった。

「お前、なんで面白そうな顔をするんだ。こんな時に人を嗤うなど、品性を疑うぞ」

「いや・・・俺は山小屋育ちで品性とか・・・」

「その話は今はいい」

自分から振っておいて・・・と炭治郎は頭を掻いたが、義勇は取り出したスマホを手にして操作し、炭治郎にその画面を見せつけた。

「これはなんだ？」

それを見て炭治郎の足のつま先から髪の毛の先端まで血が上るのを感じた。

それはメイドの姿をした自分が、赤く欲情した顔をしていて、スカートを捲られて生足を晒されている写真だった。

「あ、あの、それ、どこで……！」

「倒れていた生徒のスマホから淫気を感じ取ったから、覗いただけだ。安心しろ、生徒の方は消してある」では、なぜ義勇は自分のスマホにその写真を移したのか。

あれから神楽が終わって、教室に倒れ伏している二十人の男子生徒の傷を癒し、蜘蛛の糸に拘束されていたところからごっそり記憶を消去した。

多少炭治郎と『縁』が繋がってしまったかもしれないが、真実を知ればもっと心的衝撃は大きいだろう。

「あと、これも記録されていた」

義勇は再びスマホを操作し、スピーカーにして部屋中に音を響かせて炭治郎に聞かせた。

『やめて欲しいなら、やり方はわかっているな？俺たちを愉しませてくれよ、メイドさん』服のチャックが下ろされる音が聞こえ、次いで濡れた音が聞こえる。

『わ、わかった、やる……！』

『言い方が違うなあ。欲しかったらちゃんと強請れ』

一瞬炭治郎が意気込む呼気が聞き取れたが、すぐに観念した様子で小さな声で言った。

『あ……あなたの……ま……魔羅を……なめさせて……くだ』

「わあああああああああ！」

炭治郎は義勇のスマホを奪おうと俊敏に動いたが、それを上回る動きで義勇は避ける。

「随分愉しんだようだな」

「ち、違います！誰がそんな言葉好き好んで……！」

「セックスの強請り方まで心得ているとは、さすがヒノカミの巫子だ」

「や、止めてください！」

義勇の握ったスマホからは、炭治郎らしい喘ぎ声が出ている。その声を聞いて、炭治郎は少し驚いた。
(え？これ俺の声？)

女のような裏返った声に、鼻にかかった甘えた声。自分の声とは信じ難いが、状況とあの時の記憶からして炭治郎で間違いないが、自分の闘事の最中の声がこれだとは信じられなかった。

炭治郎が少し気を抜いた瞬間、膝を掬われてそのままベッドの上へ仰向けに倒された。炭治郎はとっさに起き上がるとしたが、義勇が身体ごとのしかかってきて両手首を掴まれ、ベッドへ縫い付けられてしまう。

「炭治郎、精気が必要な時は俺から吸え」

綺麗な顔が迫って、炭治郎の胸がトン、と高鳴ってしまう。

「で、でも、義勇さんがいつもいるとは限らないじゃないですか……」

「戦闘になったらいつでも俺を呼べばいいだろう」

「でも、朝はくだらない用事で呼ぶなって……あ……」

義勇に首元を優しく噛まれ、舌でなぞられる。熱い舌の感覚に背中がゾクリとする。

「お前にとっては、死にかけてまで助けを呼ばないのは『くだらない用事』か？」

そう言うのと、また炭治郎の首を甘噛みする。そこは頸動脈だ。今、義勇が本気を出して歯を立てて引き千切れば、炭治郎は死ぬ。

「いえ・・・その・・・正直忘れてたと言うか、それどころじゃなかったと言うか・・・」

爆発したかのように義勇の怒りの匂いが濃くなった。その怒気に炭治郎は引き攣った声を上げそうになったが、逃げられず、さらに義勇の顔が間近まで迫る。

「お前にとつて、俺は忘れるような存在か？」

「いえ、その・・・」

義勇は忘れられたことを怒っているのだろうか。さっきからの言葉を射ない言葉ばかりで責められ、意味がわからない。

「んん・・・っ」

そのまま口づけられ、舌を挿れられる。同時に義勇の妖気が炭治郎の中に流し込まれ、炭治郎の身体は反射的に陽気へと転換し、自らの霊力として身体中に行き渡らせる。

身体中に霊力が満ちてゆく感覚が気持ちいい。疲労で重かった身体が軽くなり、一瞬唇を離されたとき、思わず愉悦の吐息をついた。

もう霊力は十分だというのに、義勇はずっとキスをし続ける。炭治郎の口腔の隅々までに舌を這わせて、あまりの執拗さに炭治郎は身体の奥に妖しい感覚を呼び起こしてしまう。

「ふっ・・・あ・・・」

長かった口づけがようやく終わり、義勇が唇を離すと、上気した顔で目を潤ませた炭治郎が目の前にいる。義勇は、今度は炭治郎の顔に舌を這わせ、妖力を注いでくる。

(ちよつとピリピリする……)

炭治郎はその感覚に身体をヒクつかせて逃げようとするが、今は両手で頭を抱くように捕まえられて逃げられない。

額から鼻筋に向かって這う舌は、炭治郎の顔に刻まれた裂傷をなぞっていた。義勇が全てに舌を這わせたとき傷は完全に癒え、痛々しい傷はなくなり、いつもの炭治郎の顔に戻っている。

「二度とここに傷を作るな」

「そんなの、約束できません……戦闘中なんて、顔の傷ぐらい……」

「今度からは俺がいるだろう。俺がお前に傷をつけさせない」

耳元で囁かれて、ぞくりと妖しい感覚が湧き上がる。義勇のいつもの声じゃない。熱っぽくて、有体に言えば色っぽい。やたら艶めいている。

「炭治郎、キスは誰とでもするものじゃない。好いたもの同士がするものだ」

「んっ、知ってます……」

義勇の声が鼓膜を震わせている。低い声が身体の表面を這い回るように伝わり、身体の芯が熱くなってくる。止まらないスマホからは、自分のものらしい喘ぎ声はずっと聞こえている。唇を親指でなぞられると、肌がヒクついたのをとめられなかった。

「お前のそれは、知識として知っているだけだ。理解ってない」

「それぐらい、わ、わかってます・・・」

身体の奥が熱くなる。もうこれ以上囁いてこないでほしい。

「キスが駄目なら、そこから先もそうだとする事は？」

義勇の囁く声が頭の中を舐め回すように這い回る。後頭部がぞくぞくし、背中が甘く震えてくる。

「せ・・・セックスのことですかっ・・・」

震えないように声を絞り出すのが精いっぱいだった。身体にほとんど触れられていないのに、身体が勝手に昂ぶって熱くなる。

「それに至るまでの工程もだ。キスをされ、首を撫でられ、胸を触られ・・・」

義勇の言葉にする場所が徐々に熱くなってくる。炭治郎の呼吸が荒くなり始め、吐く息が熱い。

「んんっ・・・も、もうやめてください・・・」

「お前は胸でイけるんだったな。どんな感じなんだ？ちゃんとそれは達してるのか？」

義勇に指摘されて両胸がズキズキと疼いてくる。

「や、やめてください、昨日の浄化で、まだ、胸、敏感なままで・・・」

まだ炭治郎の桜色は鋭敏なままで、今日も登校する時、制服に擦れないよう密かにサラシを巻いて登校していたのだ。

「指で弄られるのがいいか？舌で舐められるのがいいか？」

「・・・っ」

義勇と交わった時に触れられた場所が、舐められた場所が疼いてくる。義勇の声から逃れようと炭治郎は離された片側を上にして横たわり、背中を丸める。

しかし、義勇の腕の中からは逃れられていない。上になった片耳に、唇がつくほど近くに寄せられ、さらに言葉を流し込まれる。

「胸を触りながら他の場所を愛撫されると、お前は本当によい声で鳴く……」
「うっ……」

頭の先から足のつま先まで快樂の電流が走り、炭治郎は熱い息を吐きながら戸惑いを隠せない。手首以外には触れられていないのに、身体中がすでに発情状態になり、性的な熱の昂ぶりが止められない。太腿を擦り合わせたとき、間に雛先を挟んでしまい、擦れる感覚に腰が反射的に跳ね上がる。義勇に気づかれたらどうか。もしこんなことを知られたら恥ずかしくすぎる。

「炭治郎、息が荒いぞ。傷が疼くのか？」

（疼いているのは傷じゃない……）

反射的にそんなことを考えてしまつて、炭治郎はなんてことを、と自分を恥じた。身体に一指も触れられていないのにこんなに身体が昂るなんて、どんな淫乱だと思わるだろうか。

「体中に傷ができているからな。後で全部舐めて、治してやる」

先ほどキスしたときの熱い舌で身体中を舐められるのを意識してしまい、炭治郎の肌は痙攣した。スマホからは自分のものらしい喘ぎ声がつつと聞こえ続けている。こんな時に、止めて欲しい。

炭治郎の身体が明らかに感じている反応をしているのに、義勇は耳元で囁き続けるだけで身体には一切触れてこない。しかし、肌を重ねる官能的な愉悦を連想させる言葉ばかり聞かせて、炭治郎を想像だけで興奮させる。

『あああつ！あつ、あつ、ああああ！』

スマホから聞こえてくる、自分の物とは思えない艶声が炭治郎の心に重なる。こんな風に喘げたら楽なのに、そんなことはできない。

しかし炭治郎の身体はすでに淫熱で昂ぶり、肌をしつとりと汗ばませるほどになっていた。

「んっ……うう……」

「炭治郎、苦しそうだな。それとも俺の声がそんなに気持ちいいか？俺もお前の声は好きだ。いつもの声も好きだが、セックスの時の声は特別だ。誰にも聞かせたくない声だ」

「……」

背中がずつとゾクゾクして止まらない。腰の奥が疼く。太腿で挟んだ雛先は完全に反応してしまっている。耳から流れてくる声は媚薬のように炭治郎の身体を欲情させる。

(す、好きとか言うな……)

口から唾液が零れそうになり、なんとか飲み込んで炭治郎は耐える。いつもは寡黙なのに、今に限って饒舌な義勇がうらめしい。

「も、もうやめてください……」

「やめる？何をだ？俺は何もしていない。お前が勝手に欲情しているだけだ」

「よ、欲情なんて・・・」

指摘されて、さらに身体の火照りが強くなる。腰の奥が疼熱で炙られ、息が熱くなるのを止められない。

「認めたところで俺は馬鹿にはしない。お前が俺の声で濡れてくれると嬉しい」

濡れる、と言われてゾクンと腰の奥が疼いた。スマホから聞こえてくる艶声が、惑わせて来る。もしか自分分は、もうすでに欲情の声を上げて義勇の下で派手に身悶えているのではないだろうか。

「んっ、んんっ、あ、はぁ・・・」

炭治郎は吐息をすでに隠そうとせず、熱のこもった声で喘ぎ始めた。炭治郎の身体から甘い花の匂いが漂い、義勇に欲情の証を突き付ける。

「いいな、お前の匂いは。特に発情したときの匂いを嗅がされると、こちらもそういう気分になってくる。身体に触ってほしいか？炭治郎」

(触ってほしい)

どくん、と心臓が跳ね上がる。今すぐ身体中をその広い手で撫で回して、酷いやり方でもいいから抱いてほしい。

「あっ・・・あ、も、やめっ・・・!」

「好きだ、炭治郎・・・」

これ以上ない艶めいた声で囁かれ、炭治郎の胸が切なくなり、身体が急激に熱を帯びる。

「うあっ・・・!あっ、あああっ!」

叫んだ炭治郎の口端から唾液の筋が流れる。

頭のとっぺんから首の後ろ、背中にかけて甘い痙攣が起こり、背を反らせながら、炭治郎は反射的に股座へ手を滑り込ませて、押さえつけた。

しかし信じられないことに、熱く濡れる感覚が広がっていて、触れられもせず絶頂したのだと、信じられない思いだった。

「はあ、はあ、はあ、ああ・・・っ」

（そ、そんな、声だけでイカされた・・・？）

ヒノカミの修行でも座学で聞かされていたが、実際に体験するのは初めてだ。愛する者同士が囁き合うだけで、僅かな触れ合いだけで絶頂するスローセックスというものらしいが、これほど身体に愉悦が訪れる痺れるほど甘美なものだとは思わなかった。

「イッたようだな、炭治郎。お前は本当に感じやすい」

「ふあ、ああ、ああっああっ」

義勇はそう囁きながら、ようやく炭治郎に触れてきた。ずっと声の媚薬を注がれていた耳に甘噛みされ、後頭部から腰にまで疼痺れが走る。

義勇はようやくスマホから流れる声を止め、声だけで絶頂して妄つとしている炭治郎に再びのしかかった。

「まさか本当に脳イキするとはな。多少幻惑したが、俺も初めてだ」

「の・・・脳・・・？」

義勇の声が耳に入ってきて来るだけで、もう身体がぞくんとしてしまふ。

そんな炭治郎を眺めながら、義勇は腕に貼られたパッドを剥がしてゆく。そして現れた朱線に舌を這わせた。

「っ……っ」

今、義勇に触られるのは刺激が強すぎる。舌の熱さが肌を伝って、炭治郎の頭まで火照らせてゆく。

「治った」

そう言って炭治郎の眼前にまで腕を持ち上げ、治った場所を見せつける。

「ありがとうございます……」

小さい声で炭治郎が律儀に礼を言うが、目は虚ろで潤み、顔もすでに赤く、身体全体が触れてほしい、と無言で義勇に訴えてくる。

「全部舐め治すんだっとな」

そう言って義勇が少し笑ったような気がした。Tシャツを派手に捲られながら、炭治郎は

(どれぐらい身体に傷あったっけ……)

とぼんやりと思った。

しかしTシャツを捲り上げたところで、義勇の手が止まった。また怒りの匂いが漂ってきて炭治郎は焦る。

「あ、あの、そのあたりはあまり傷がないはずですが……」

「違う」

冷たい声で言って、義勇はハーフパンツに覆われていない臍から鎖骨までを撫で上げる。

上半身のいくつかの場所でぴりぴりとする刺激が走り、怪我などしていないはず……と炭治郎は訝しがるが、今度は義勇が鎖骨を舐めてきた。

「ふああっ！あつ、ま、待ってください、今刺激されたらたまらないんです」

先ほど脳イキをしたばかりの炭治郎の肌は、針のように性的に敏感になり、その体を震わせた。

「お前の身体……自分でどうなっているのかわかっているか？」

不意に義勇に問いかけられ、炭治郎は意味が分からなかった。自分の身体は、先ほどの義勇の甘言で発情状態にあることだけわかっている。

しかし義勇が指摘したのは当然そういう事ではない。

※続きは製品版でお楽しみください※